

1979年度 春季研究発表会

1979年度春季研究発表会が、3月14日(水)15日、16日(見学会)北九州市新日鉄中尾教育センターで行なわれました。この大会は、九州大学工学部須永照雄教授を実行委員長とする計18名の実行委員によって準備されました。以下その報告をいたします。

概括 今回の特別テーマは、産業界からの積極的な発表を期待して、「経営とOR」を取り上げてみました。また発表件数は、特別講演3件、研究部会報告4件、一般研究発表80件、ペーパー・フェア9件で計96件の発表がありました。出席者は正会員135名、学生会員26名、賛助会員17名、非会員14名、計192名でした。

第1日目は、発表会場が遠隔地であり、悪天候も重なり出足が悪く、会員の半数が昼から出席する状況となった。ただプログラムの編成上、午前時間帯は特別講演であったために、地元企業の一般聴講者があり、一応の体裁は整えることができた。また初の試みとして、全員が一堂に会し、2日間の盛況を期すために開会式のセレモニーを冒頭に設けてみたが、学会会長よりメッセージをいただくことができた。

特別講演 第1日目は、西日本新聞社益田憲吉氏により「時局講演—九州地域の政治・経済について」の講演をいただき、非常に魅力あふれる話法により聴衆を引きつけていた。引き続き正会員であられる広島大学岩本誠一氏により「制御過程・配分過程の逆理論」の講演があったが、当発表は第6回OR学会文献賞を記念して企画されたものであり、格調高いものであった。

第2日目は医学界よりの発表で、産業医科大学学長土屋健三郎氏により「産業医学の最近の動向について」講演を受け、とくにORとの協力に触れられたことが、記憶に残った。

研究発表 4会場にわかれて発表を行ない、A会場は今大会の特別テーマである「経営とOR」関係を集め、B会場：信頼性、C会場：数理計画、D会場：統計・情報理論と一応体系的に区分した。各部屋とも座長各位の司会よろしきを得て、手際よく進行したもようである。

ペーパー・フェア 第1日目の16時30分より1時間の予定で9件が並行的に発表されたが、「夜店的」雰囲気を出すために、同一会場にセットして行なった。各発表ともオーバーヘッド、スライド等の発表器具を利用したた

めに、電力オーバーをきたし、プレーカーがとぶという異常事態が起こったのは主催者側の手落ちであり、当紙面を借りお詫びいたします。ただ内容は非常に充実しており、制限時間を過ぎてても机を離れず、議論が行なわれていたのが深く印象に残っている。

懇親会 第1日目の18時より、北九州市の公共施設である勤労者会館で懇親会を催したが、70名を越す参加者があり非常に活況を呈し、また参加者の顔ぶれも従来のイメージと異なり、若い人が非常に多かった。

見学会 16日に貸切バスを利用して、「八丁原地熱発電所と観光中北九州」の内容で見学会を催したが、定員一杯の参加者を得た。当日は天候にも恵まれ、まったくスケジュール通りの行動であったと報告を受けている。

反省と謝辞 参加者が予定よりやや少なかったことが非常に残念であった。また若干の苦言を呈するならば、参加者の中に途中入場、途中退場者が目立ったが、自分の発表を聞いてもらいたいならば、また相手の発表を聞いてやるという精神が必要ではなからうか？ 企業人の感覚からして途中入場、退場は理解し難い。

最後に、皆様のご協力によりまして無事大会が終了し得ましたことに対して、厚く感謝の意を表わします。

(九州支部 池上勝英)

春季大会参加の記

企業経営のOR活動に関わる1人として、特別テーマ「経営とOR」での春季大会は新時代におけるORを模索するうえで有意義なものであった。筆者は「特別テーマ」を中心に発表を聞いたが、全般的な印象から言えば、発表内容に比べ時間が短いためか、やや一方通行的であったことは残念であった。しかし、周到に準備されたスライド、ビューグラフの1枚、1枚に発表者の属する組織の風土なり、個性が感じられ、アブストラクトだ

けではわからない舞台裏を垣間見た気がした。

以下、個別的に述べると、「経営分析の手法としての行列簿記に関する一考察」は筆者自身以前から興味をいただいていた「マトリックス・アカウンティング」の問題であり、また最近では戦略的な観点から脚光を浴びてきた手法だけに、初めて学会の場で報告されたことに敬意を表したい。

「大学モデルの展開」は一見企業とは無関係なように思われるが、財政収支の問題は本質的に企業経営における重要課題であるので、システム・ダイナミクスによるアプローチから大いに示唆をうけた。

「中高年問題についてのシステムのアプローチ」については、実際の企業からの報告であることと、高齢化社会への対応がせまられつつある現状からその発表が期待された。とかく、人の問題は情に流されがちであるが、個人、企業、国家の3レベルについて問題を識別し、1つの体系的アプローチを試み、その帰着するところを各個人の人生観と満足度であると結論づけている点が新しい時代の実践的ORの一事例であろうか?!

「量産品における地域別販売力の推定方式」は筆者も自動車用ガソリンの地域別需要予測の作業を経験したことがあるので、PPM的な発想にたつと思われる地域別市場占有率、販売成長力の合成図は参考となった。今回は今回ふれられなかった最も難しいケースについてその推定方式をぜひお聞かせ願いたい。

「電力の地域経済と国民生活に対する寄与効果分析」は地域における社会的責任を産業連関モデルにより解明しようとして取り組まれた実践型ORであることに共鳴した。地域対策はどの企業でも重要な課題であるが、難点は企業と地域の論理のくいちがいであり、このような面へも新しいORアプローチを期待したい。

ペーパー・フェアでは「経営に役立つOR」と題して、伯野氏がこれまで長年にわたり蓄積されてきた「奥義」を参加者に伝授する形となった。ここにいう「経営に役立つOR」とは決してORをふりかざしたものでなく、相手の立場で誠実に問題解決に取り組む姿勢を指し、氏はこれを上考方(上手な考え方)と名づけている。この「上考方」に対し大いに感銘をうけると同時に反省をせまられた次第です。

これまで思いつくままに述べてきたが、結局、小林会長のメッセージにある『新しい時代におけるORとはFact Findingを基本に研究者と実務家の交流をはかり、新しい問題に対して、新しい近接法を積極的に開発すること』に求められよう。そして今回の発表会がこの命題にどこまで答えられたか、参加者全員が考えてみる1つの貴重な機会であったように思う。

最後になりましたが、春季大会の準備、運営に尽力された大会関係者に対し深甚なる感謝の意を表しつつ、参加の記といたします。(芝野誠一 東亜燃料工業)

大会ルポ

浦谷氏(東工大)の発表は「省エネルギーと日本のエネルギー需要」と題し、西暦2000年以後までに及ぶ長期のエネルギー問題を研究されたものである。氏は「このような分析は経済的なモデルによるアプローチでは不十分であり、工学的なアプローチが必要である」と述べられ、エネルギーに関するORの重要性を間接的に指摘された。産業連関分析を用いられたために、純工学的な分析ではないのではないかという意見が出た。

続いてC会場に向かい、中沢喜久雄氏(鹿島建設)の「廃棄物処理のための輸送計画における立地決定問題について」を聴く。反町洋一氏の立地決定問題の解法を、廃棄物の処理センターの配置に適用したもので、宮城県を対象とした実践的な研究である。その内容のおもしろさもさることながら、きれいな色彩のOHPネガには、聴衆からも驚きの声が上がったほどで、今回の研究発表会では氏の技法を取り入れた美しい発表がいくつも見られるのではないかと思った。

すぐにA会場にもどり、桑原兵二郎氏(近畿大学)のグループによる「市街地の統計的分析」と題された一連の研究発表を聴いた。市街地の要素コード間の距離を非常にユニークな形で定義し、それにもとづいて都市の商店街を分類しようという研究である。実際の都市を対象とした実証的研究も行なわれているので、机の上だけにとどまらない研究として大いに興味をもった。私は、昨秋の研究発表会をサボったために、この一連の研究の初めの部分を聴いておらず、理解が不十分な点がかなりあったので、これからは研究発表会は必ず聴くようにしようと反省した。

ペーパー・フェアでは聴きたいものがいくつかあったので、あっちこっちうろちょろしようと思っていたが、はじめにすわった河崎俊二氏(神戸商大)の兵庫県の人口移動を対象とした発表が興味深く、結局最後まで聴くということになった。発表では、神戸市が社会減の状態になっているという注目すべき現実をはじめ、実データにもとづくさまざまな分析について述べられた。また既存のマクロモデルを用いても昭和45年以降の急激な変化を説明できるということ、実績値と推定値が非常によく合っている時系列のグラフによって主張された。まだ研究中途における発表であったため、はっきりした結論は

出ていないようであったが、地域を研究するわれわれにとっては、大いに参考になった。

2日目、地域のORに携わる者としては、都市を見てあるくのも重要な仕事であるなどと勝手に決めて、仲間とともに北九州市内を歩き回った。若戸大橋を歩いて渡ったり、関門橋まで市内電車で行ったりして、北九州の各区に一応足を踏み入れた。来るまでに抱いていた北九州のイメージが実物とずいぶん違うのに驚いた。とくに市街地が立体的であること、海と山と町並みが一体とな

り緑も多く、東京のゴミゴミした中にいつもいるわれわれの目には、とても美しい町であるように見えたことの2つの点が印象深かった。

発表会を振り返ってみると、エネルギー問題、施設の最適配置、市街地の分類、人口の動きといったまったく異なっていると思われる分野の問題が、OR学会の中ではとくに違和感もなく納まっているという点が印象に残る。

(中村 理 三菱総研)

会合記録

()内は出席者数
主査会議 3月19日(火)(11)
研究普及委員会 3月19日(火)(9)
会員増強タスクフォース
3月23日(金)(4)
庶務幹事会 3月26日(月)(6)
評議員会 4月4日(水)(18)
第7回理事会 4月4日(水)(15)
編集委員会 4月13日(金)(10)
会員増強タスクフォース
4月19日(木)(3)

第7回理事会議題 4月4日

1. 第6回理事会議事録の承認
2. 昭和54年度総会議案について
 - 1) 昭和53年度事業報告
 - 2) 昭和53年度決算報告
 - 3) 監査報告
 - 4) 昭和54年度事業計画案

- 5) 昭和54年度予算案
- 6) 昭和54年度役員候補者
3. フェロー推薦について
4. 秋季研究発表会の実行委員並に特別テーマ
5. 入退会
6. 4学会連絡会の報告

入退会

53年度退会者(正会員)

青木敬行 石井正純 一條幸夫
宇山武彦 大亦秀之 大西興平治
岡崎正彦 大瀧 厚 北林琢男
小泉隆挙 齊藤雅紘 篠原正明
鈴木敏行 高木俊一 豊島文雄
中川道廣 星野哲三 矢野真和
吉田 裕 尾崎正亮 岡崎美晴
神尾 孝 加藤 隆 横田真一
(賛助会員)
オリエント・データ(株)
入会(54年度より)(正会員)

秋山 一夫 (有)公文数学研究所
池上 勲 北海道庁
甲斐庄泰生 (株)三井銀行
熊澤 昭良 東京大学医科学研究所
国原千津子 (株)日立製作所
添田 定男 明友商事(株)
高橋 敬二 日機装(株)
東 英明 オリジナル光学工業(株)
藤原 信一 (株)ユサ・コンピュータ
程野 真 戸田建設(株)
武藤 滋夫 東京工業大学
赤司 郁夫 東北金属工業(株)
川合 庸一 住友ケミカル
エンジニアリング(株)
嘉数 侑昇 北海道大学
出口 裕康 東亜合成化学工業(株)
古川 正志 旭川工業高専
(学生会員)
藤村 康夫 青山学院大学
山岸 国夫 神戸大学
熊谷 紀男 慶応義塾大学

編集後記▼貴重な提案や研究成果も、他人に正しく伝わらなければ何の役にも立ちません。プレゼンテーションの重要性は宮本市朗氏(本誌2月号、トップの視点)が指摘されている通りです。社内での情報の伝達や研究発表会の際に本特集号が少しでもお役に立てば幸いです。

▼もっとも、図表作製費は本誌のコストの中で非常に大きなウェイトを占めますので、本誌への御寄稿の際はできるだけ少ない図表を効果的に使っていただけるとありがたいというのが編集者の本音ですが、(R)

オペレーションズ・リサーチ

昭和54年5月号 第24巻(新シリーズ第4巻) 5号 通巻221号
代表者 小林 宏 治
発行所 社団法人 日本オペレーションズ・リサーチ学会
東京都文京区弥生2-4-16 学会センタービル
(電話 03-815-3351~2) ☎ 113
編集人 奥野 忠 一
発売所 株式会社 日科技連出版社
東京都渋谷区千駄ヶ谷5-4-2 ☎ 151

本誌のご注文は直接

日本オペレーションズ・リサーチ学会へ

定価 650円(郵送料含)年間予約購読料 7200円(郵送料含)

本誌への広告お申し込みは日経弘報社(563-2241)、明報社(571-2548)へ